

文学の立場から

渡辺憲司

渡辺です。

勝手なことを申し上げますが、閑話休題としてお聞きいただきたいと思えます。

昨日の夜、豊見山先生が指摘された岩波新書を読んでいきましたが、なんか嫌な書き方だなと思っていたのですが、それを今、豊見山先生に指摘していただいて、胸のつかえが下りたような気持ちです。確かレジュメの最初の方に書きましたが、薩摩というのは、江戸っ子といいますが、江戸では歓迎されていないですね。幕末から明治初年にかけて特にそうだと思います。江戸っ子は薩摩のことがあまり好きではない。だいたい遊び方も品川で乱暴な遊びをしているのが、薩摩の人たちですね。立教であまり薩摩の悪口を言うのはよくないですね。かつて史学科には、大久保利謙先生がいらっしやって、そして、野球部には西郷さんの子孫の方もいらして大活躍しています。鹿児島と立教とい

うのは今も大変関係が深いので薩摩の悪口を言うのはよくないかもしれませんがね。それは冗談として、江戸っ子に、薩摩はあまり人気がない。品川で江戸時代に遊んでいて、一番品がないのが薩摩。新橋で成り上がって遊ぶのも薩摩人だというわけですね。

それに対して、琉球に対しての江戸っ子の感情は、憧れのようなものがありましたね。例えば遊女の髪型もそうですね。唐髷ですね。あの唐髷というのは、やはり琉球というか唐への憧れみたいなものがあったと思いますね。もちろん異国的なものにあこがれると言うことがあるのでしようがね。

そして、琉球のもの考え方に対して、江戸は、一種の尊敬といますか、ひかれるものを感じていたと思いますね。

現代でもそうだと思いますが、沖縄の家族の結びつきは

非常に濃いものがあるように思いますね。それに対して、江戸は淡泊ですね。親子の感情よりも形式的な家に重点があるのではないかと思いますね。

それに関連があるのが、僕のレジユメのところの、「琉球における〈孝〉の先進性と大和の〈孝〉の後進性」という部分です。

江戸時代の親孝行ということを、公的に表彰し、褒美をやるなどといったことを行うのは、綱吉の時代からです。私は、これは、ばかげたことをやり出したと思いますね。親と子の関係というのは私的感情ですよ。親孝行にも色々な形があるわけです。公的制度が、つまり権力者が自分の物差しで測るべき事ではないのですね。ところが、それを綱吉がかなり儒教好みといった個人的リーダーシップを取ってやり出すわけです。このような方向に、疑問を持ったのは、私のような親不孝者ばかりではありません。『徳川実紀』ですら、なんでそんな表彰みたいな事をするんだろうと疑問を持っています。道徳教育を押しつけるのと同じ発想ですね。西鶴でなくても、面白い不孝物語でも書きたくありませんね。

もちろん以前から、親孝行を称賛するという事はあったのですよ。私が言うのは、それを国家の価値基準で決めていくことがおかしいといっているのです。自然発生的な、

親孝行でいいのだと思うのです。

いささか、話がずれてしまったような気がしますが、琉球には、自然的といえますか、孝概念が、歴史的に根付いた形で存在しているのではないかと思うわけです。そして、薩摩入りではなく、孝の琉球入りと言いますか、日本への、九州への孝概念の波及ということを少し考えてみたいと思います。それを典型的に示しているのが、琉球から日本に移入された「六論衍義」の流行です。以前、沖繩の地方図書館を廻りました時、ちよつと意外だったのは、どの図書館にも、この本の版本があるんですね。このように同じ漢籍が、同じように所蔵されていることは、内地の図書館ではちよつと考えられません。それだけ、「六論衍義」が、沖繩でよく読まれたと云うことでしょう。「平成四・五年文部科学省科学研究費成果報告書」で「琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査・漢籍目録篇―琉球関係漢籍調査目録―」の報告を見てもそのことは裏付けされるでしょう。お手元に配布したのは、九大の大学院の人たちが中心になって作っている雅俗の会が発行した『福岡藩儒 竹田春庵宛書簡集』（雅俗研究叢書一 平成二一年）からの、「六論衍義和解序」（竹田春庵筆）の一部です。従来から『六論衍義』については、荻生徂徠の施訓『官刻六論衍義』、室鳩巢の和解『官刻六論衍義大意』といったもの

が出され、日本でも寺子屋の教科書として流布し、明治まで読み継がれていたことはよく知られていますね。『六論衍義和解』は、それらと同じようなものですが、和泉の豪商唐金梅所の作になるんですね。このようなものがあつたことは、この書簡集で初めて明らかになったことです。梅所から春庵に依頼したものです。私はこれほど胸を打つ和文に接したのは初めてのような気がします。実に卓越した、春庵七五歳達意の和文です。序文全体を紹介できないのは残念ですが、その一部です。

「下民を治め給ふ、近来、もろこしのみかど、下民をさとし給へる六のケ条ありしを、会稽の范縉雲、『六諭衍義』といふ書をあらはして、其ことほりをもろこしの俗話にて書のべぬ。琉球国の程寵文、甚此書を愛して、後序を撰し重刻したるが、彼国より渡り来れるを、台命に依て梓にちりばめ、又儒臣室氏におほせて、わが国の文字にやはらげ、おなじく印行せさしめ給ふ。着目は、「もろこしのみかど、下明をさとし給へる」といった、唐への憧憬と、それが琉球国から伝来したという明確な意識ですね。このことは大事に考えなければなりません。

次にやはり留意すべき点として、薩摩の国学の特徴を一つ述べておきたいと思えます。天保の改革は、風俗を取り締まる側面、柳亭種彦や為永春水など、戯作者への圧力と

いった点が多く取り上げられますが、もう一つの側面は、この改革によつて国学が広まり、各藩の刊行物でも国学が多くなったということです。これは明治にいたる精神構造として大きな側面です。その率先した藩が、薩摩藩であつたといつてもいいと思います。この点では水戸藩と手を組んでいたというか同一歩調でした。この国学のあり方を見ますと、明らかに同じ立場の外様雄藩である仙台と異なっている。これは双方の公家文化の受容姿勢においても云えるかも知れません。薩摩における場合が、自己基盤形成のための国学・和学であるのに対して、仙台藩は自己韜晦的受容といえますが、和歌をはじめ学問することが、幕府の前でおとなしくするための方便のような気がします。所謂伊達騒動、三代綱宗以降それは顕著のような気がします。対して、薩摩の国学は、むしろ反幕府といえますが、京都の文化に近づくことによつて、自己の基盤を天皇方といえますか、公家文化方に寄り添っていくような気がします。そしてその姿勢が、琉球への国学・和学のかなり教養的な文化波及に影響を与えたのではないかと思うわけです。

私の専門は、近世文学で最近の関心は遊郭史ですので、沖繩の遊郭と薩摩の遊郭の咄を少しさせていただきます。沖繩の遊郭関連として、「沖繩には遊女墓がない」（『文学』岩波書店・一九九八年六月）という小さなものを書いてお

ります。又来年一月（二〇一〇年）に刊行されます。池宮先生の退官記念論文集にも書かせていただいておりますので、そちらの方もお読みいただければと思います。江戸時代には、薩摩に、鉾山周辺は別にして、宿場や都市部で遊郭はなかったようです。天保六年の『鹿児島振り』にも「なきものは一向宗と遊女屋のみ」とあります。又明治五年九月「新聞雑誌」第六一号には、「近日鹿児島ヨリ帰りシ人ノ話ニ、同県管下ハ旧来男色ノ悪弊アリシガ、近時ハソノ風稍衰エタリ、ヨツテ妓楼ヲ設ケンコトヲ企ツル者コレアル由」と記されています。公然と遊女をおくというようなことはなかったでしょう。寛政七年刊の橘南谿の『西遊記』には、「薩摩にては遊女なきゆへに彼国（琉球）よりは多く若衆を連来る。」等とあります。薩摩の状況に對して、沖繩の遊郭が盛んであったことは申すまでもないでしょう。やはり『西遊記』には、「那覇の湊に日本人のために遊女あり。一昼夜二百文ばかりに揚話にかい置事なり。半年にても一年にても彼国に逗留の間は此遊女我女房のごとくにて、第一商売の事をよく世話し働くゆへ、かへつて商売よく出来て勘定の為にもよしとて、琉球に渡る商人は年老たる者も彼国に至ればかならず此遊女を揚話に買事と也。」とあります。やはり、このようなどころからも、沖繩が幻惑的と云いますか、誘惑的と云いますか、まず魅

力的な所として江戸時代の人々に考えられていたことは確かなようです。藤本箕山の『色道大鏡』に、悪性のものとして、三味線が上がっています。三味線が琉球渡来のものであったという認識は、その説の当否は別にして、風説として固定したものであったことは確かです。そしてそれは淫声として、風俗を乱すものとして権力者から忌避されましたが、江戸っ子にとって魅力的なものであったことは事実です。私は琉球に対して、江戸の人々がもつと素朴に、単純な意味であこがれを持っていたことを考えていいのではないかと思えます。そしてその裏返しに薩摩嫌いといった、明治の江戸っ子の感情も再考してみる必要があるような気がします。

（本学文学部教授）

**全体討論司会（荒野、以下同）** どうもありがとうございます。では引き続き、あらかじめフロアからの発言ということをお願いをしましたお二人に、お話をさせていただきましたと思います。最初は渡辺美季さんですけれども、レジュメは、このレジュメ集の中に入っております。

現職というか、いまは東京大学の助教をしていらっ

しゃって、もともと東洋史の研究者、東洋史の研究からスタートされたということですが、今は琉球史を専門としておられます。最近、びっくりするぐらいたくさんの論文を書いておられて、こういうシンポジウムや公開講座とか講演会などを考えるとき、オブザーバーみたいな形でご発言いただく場合には、わりと年配者の方が多くなっているわけですけども、この講演会では、むしろ講演とコメントをいただいた方々の次の世代の方々、いま、まさに研究が上げ潮に乗り始めている人に、ぜひ発言をお願いしたいと考えてお願いした次第です。では渡辺さん、お願いしますか。